

漢〈封部等字残碑〉小考

A Study of Fengtai Canbei (〈封部残碑〉) of the Han Dynasty

横田 恭三
YOKOTA Kyozo

要旨

二〇一五年九月、河北省邢台市開元寺東側にある邢台博物館の敷地内より、漢代の残碑が発見された。全文で百余字しか残されていない断碑のため碑名が欠けているものの、首行に「封部」の二字があることにより、〈封部等字残碑〉と命名された。残された碑面の文字そのものの劣化の程度は軽いため、拓本であっても字口が明瞭で、筆遣いの呼吸が垣間見られるほどである。

この碑は、胡湛・石從枝による論考「荊州新出土《漢封部残碑》考」（『書法叢刊』二〇一三）で紹介された。これによれば、後漢・靈帝の中平六年（一八九）の刻とされる。〈曹全碑〉〈張遷碑〉とはほぼ同時代の隸書碑にあたるが、その方正な隸書の書風は〈熹平石經〉〈張遷碑〉に近似しているとみる。本論考では先行

論文を参考にしつつも、〈熹平石經〉〈張遷碑〉の比較のみならず、後漢晩期の一つの筆法と考えられる方正な隸書書法が、同時代においてどのように受容されていたのか、また後の魏の隸書書法との関連はあるのか、当該碑を中心に検討した。その結果、いくつか新たな見解を示すことができた。まず碑面の文字の配列スペースは類例がほとんど見当たらない特殊なものであったこと。二つ目に特異な字形・字体を用いていること。〈張遷碑〉はつとに誤字や不適切な仮借字が用いられていることが知られているが、〈封部残碑〉も特殊な字形・字体がいくつか使われていた。さらに、左右の払い出しの収筆部に見られる「燕尾」、頭部を突き出す奇抜な造形、一字の中で強調する筆画、呼吸の短い払い出し、あるいは脚部の短縮など、これまで見られなかった造形感覚であることも分かった。

後漢末から魏晋にかけて、隸書がよりパターン化する中で製作されたものの一

つが〈封郃残碑〉であつたといえよう。

はじめに

二〇一五年九月、河北省邢台市開元寺東側にある邢台博物館の敷地内より、文字が刻まれた残石が発見された。いわゆる残碑のため、全文で百余字しか残されていない。首行に「封郃」の二字があることにより、〈封郃等字残碑〉（以下、文中では〈封郃残碑〉と略称する）と命名された。

歴代の著名な石碑は、書法史上、諸家の推奨を経て、確固たる地位を保ってきた。しかし、どれほど優れた手になる古代の石碑であっても、宋代以降の拓本を通して鑑賞した場合、拓紙という、いわば一枚のペー
ルを介しての鑑賞になるだけでなく、長い時代を経てきたことによる劣化（自然による風化や人工的な破壊）も作用して、当時のままの字姿だとは言ふことはできない。

〈封郃残碑〉は断碑ではあるが、残された碑面の文字そのものの劣化の程度は軽い。おそらく立碑後の早い段階で何かの事情によって倒壊し、地中に埋もれたものと考えられる。歴代の名碑は、名碑なるが故に後世の人々によっていたずらされたり破壊されたりすることもある。それらに比べると、〈封郃碑〉は拓本であっても字口が明瞭で、筆遣いの呼吸が垣間見られるほどである。そのためであろうか、文字に清新さすら感じられる。

当該碑は、先行研究により、後漢・靈帝の中平六年（一八九）の刻と

される。すると〈曹全碑〉〈張遷碑〉とはほぼ同時代の隸書碑にあたるが、その方正な隸書の書風は〈熹平石經〉〈張遷碑〉に近似しているとみる。本論考では先行論文を参考にしつつも、〈熹平石經〉〈張遷碑〉の比較のみならず、後漢晩期の一つの筆法と考えられる方正な隸書法が、同時代においてどのように受容されていたのか、また後の魏の隸書法との関連はあるのか、当該碑を中心に検討してみたい。

一．〈封郃等字残碑〉の出土と先行研究

〈封郃残碑〉は二〇一五年九月、河北省邢台市より出土したため、先行研究は、管見では『書法叢刊』二〇一三に掲載する胡湛・石從枝による「邢州新出土《漢封郃残碑》考」と『中国書法』二〇一六（徐立君、胡湛による「邢州新出土《漢封郃残碑》考」の二種だけである^{〔註1〕}。この二種に共通する執筆者の胡湛氏が同一人物で内容にほとんど差がみられないことから、本論考では『書法叢刊』を参考に検討してみたい。ここには残碑出土の状況、碑文釈義、残碑の刻立時間、碑形制の推移、碑主と残碑の命名、〈封郃残碑〉の芸術的特徴が詳細に論述されている。

二．〈封郃等字残碑〉の文字とその内容

残碑の文字

：封郃、遠歷式代暨周：

…章句、兼詩耽禮、論語…
 …挾部、職鷺擊之翼、三…
 …年、州嘉政治、刺史陶…
 …司空宗公旌命招…
 …舉孝廉、除郎中、兼河…
 …之後、兼領弓高、武垣…
 …令視事三載。鮮卑犯…
 …「求」退、歸來之日、遂離…
 …「平」三年、歲在撰提四…
 …「建巳」巳冬十一月甲…
 …
 …恒。俯惟奚斯頌先之…
 …曰…
 …慰邊民、冀階九…
 …府幕、義…

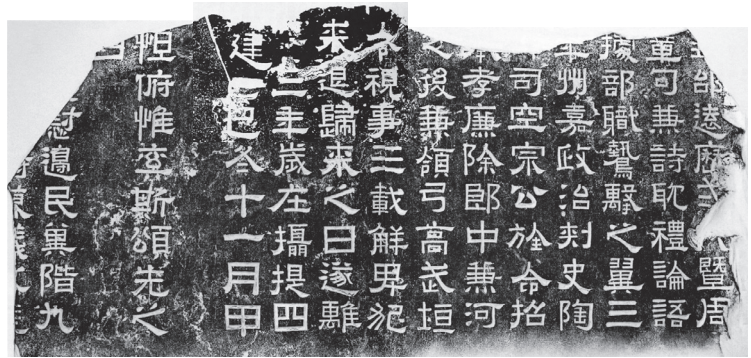


図1 〈封郃殘碑〉全景

先行文献を参考に碑文の意味の概略をまとめると、以下のようになる。
 碑文に記載されている碑主の祖先は、郃国に封ぜられた^(註2)。文事においては『詩』『書』『論語』を熟読し、武事においては兵を率いて敵を撃退した。文中に「刺史陶」の語があることから、当時、幽州刺史に任ぜられた陶謙は、ひよっとすると碑主と親交があったのかもしれない^(註3)。
 司空宗公、つまり宗俱は賢人を招聘させた人であると記す^(註4)。碑主は

学問優秀で孝廉に推挙され、郎中兼河間郡長官に除せられ、並びに弓高、武垣（ともに地名）の管轄を兼ねた。のち鮮卑族が国境を超えて侵入、碑主は鮮卑族を首尾良く攻撃することができ凱旋して帰国した後、官を辞して故郷へ帰った。碑文はこれらの文のあと、「□平三年」「□□巳冬」の二つの年号に関係する語が刻まれている。胡湛・石從枝の検討に拠れば、当該碑の第一〇行「□平三年、歳在撰提四」と、張遷碑文中「惟中平三年、歳在撰提二月震節」の語とを比較してみると、二碑の体式はほぼ同じであり、「撰提」と称する紀年法の一つを採用している。つまりこれは寅年に当たるものである。次に第一行「□□巳冬十一月甲」^①巳巳年は延熹年間より早い場合は永建四年（二二九）、遅れる場合は光熹元年（一八九）中平六年）となるが、後者の方が適している。よって「中平三年」（一八六）は碑主が刑州の任を終えて離れた年であり、中平六年（一八九）が立碑の年に当たるとみる^(註5)。つまり、中平三年に卒し、中平六年に立碑したと考えられるのである。

なお、碑文に「慰邊民、冀階九」とあることにより、碑主は鮮卑族を鎮めるのに功績があり「冀くは九階に昇らん」の状況に至った人だと考えられる。また碑文末に「幕府、義」とあることから、おそらく王府幕僚、義士あるいは義従ではないかと推測している。ここに記された官銜は碑銘の後にあるため、あるいは碑主の直属の碑を建てた人の官銜または身分の名称であるという可能性も排除できない。以上が、胡湛・石從枝両名の碑文に関する論考をまとめたものである。

中平六年の前後に刻された石碑を挙げれば、白石神君碑（一八三年）、

〈王舎人碑〉（一八三年）、〈曹全碑〉（一八五年）、張遷碑（一八六年）、〈閼令趙君碑〉（二九〇年）、〈樊敏碑〉（二〇五年）などが知られている。

報告では、残碑の幅が一二四cm、高さが八五cmとある。一行最大八字、読み得る総字数は百五字である^{註6}。両サイドの文字が欠けているため、文字の行数は一六行よりいくらか多いかもしれない。〈張遷碑〉は一六行、満行四二字である。〈礼器碑〉は同じく一六行、満行三六字である。〈封部残碑〉が仮に一六行、満行三六字であったとしたら、おそらく五百字を超えるであろう。現在判読可能な文字は石碑全体の五分の程度にしかならない。こうした状況において、前述のように碑文の解釈が詳細に確認できたことは先行研究の成果といえる。

三、〈封部等字残碑〉の文字の特徴

先行研究によれば、方整を旨とする〈封部残碑〉の字形は〈張遷碑〉や〈熹平石経〉に近似するという^{註7}。しかし、つぶさに比較してみると、共通する特徴ばかりではなく、相違点も見いだせる。以下に指摘してみたい。

まず全体の文字の配置を考えてみたい。一字を配置するスペースの比率であるが、縦一に対して横は一・二のスペースを取っている。〈曹全碑〉は扁平な造形が多いが、縦横のスペースの比率はほぼ一対一である。〈熹平石経〉（周易）のそれは、やはり一対一である。つまり〈封部残碑〉は、これまでの漢碑に比べて方形のマス目ではなく、やや扁平なマス目にや

や縦長気味の文字を刻していると考えられるのである。よって視覚的にはこれまでの後漢の石碑にはほとんど見られなかった現象、つまり字間よりも行間の方に一定のスペースを生じさせているのである^{註8}。次に特殊な字形について検討することにする。

特殊な字形（一一二―一四頁の表1参照）

遠…〈封部残碑〉は「袁」の下部を篆体に従っている。この例は後漢後期の石碑にはほとんど見られない。後漢末年の作ではあるが、篆体の名残りがひよっこ顔を出すのはなぜであろうか。

耽…〈封部碑〉は耳偏を「耳」に作る。同じ耳偏の「職」は「𦍋」に作っている。耳偏の書きぶりはどちらも許容されていたものと思われる。傍の「尤」は頭を突き出さない書き方である。

職…〈張遷碑〉〈曹全碑〉はともに「耳」の左下に「ノ」がある。〈西嶽華山廟碑〉〈熹平石経〉には「ノ」が見られない。なお、晋〈皇帝三臨辟雍碑〉には「ノ」が付いている。上述の「耽」で触れたように、「ノ」の有無は許容範囲であろう。また「戈」の「ノ」が刻されていない。軽々には判断できないが、他の漢碑には類例が見られないため、単なる省略もしくは誤字のいずれかであろう。

撃…〈封部残碑〉は左の部位を「𠂔」に作るが、こうした例はない。〈熹平石経〉は「𠂔」に作る。なお、この部位と同じ字形になっている字に「離」がある。

之…扁平に作りやすい文字ではあるが、〈封部碑〉は最終画を極度に斜

め下におろして払い出している。その結果、〈礼器碑〉と比較した場合、より方形になっている。

治…〈封部残碑〉は「ム」の部位を離した造形に作る。〈礼器碑〉は〈封部残碑〉と同様に離した書き方と「△」に作る書き方との二種類が許容されている。漢の〈史晨後碑〉〈夏承碑〉、晋の〈皇帝三臨辟雍碑〉はいずれも離した書き方である。

陶…〈封部残碑〉は旁の中を「缶」に作る。〈礼器碑〉がこれに近いものの、完全に類似しているわけではない。

公…〈封部残碑〉は「治」と同様に「ム」の頭部を離している。乙瑛碑をはじめとする歴代の漢隸の碑石は「△」に作っている。

命…〈封部残碑〉のように「口」を「𠂔」字に作る例は漢碑中〈王舍人碑〉以外は見当たらない。ちなみに前漢の〈馬王堆帛書〉にも見られる^{註9}。また〈封部残碑〉は「人」のように第一画目を上へ突き出す字形は〈西嶽華山廟碑〉にも見られ、魏の〈正始石經〉をはじめとする多くの石碑に受容されている。ただし、〈封部残碑〉ほどには強調していない。

招…〈封部残碑〉の旁「召」上部は三画で書くように見える。この造形様式は他の漢碑に見られない。

孝…〈封部残碑〉は第四画目「ノ」を二筆で書いている。篆体は〈乙瑛碑〉〈礼器碑〉のように第三画目と第四画目とをたすき掛けにする。〈張遷碑〉や〈曹全碑〉は二種の書き方が混在することから、この時期にはどちらも使用されていたものであろう。

中…〈封部残碑〉は第一画目と第二画目のジョイント部分ならびに第二画目の転折部分の縦画を上へ突き出している。同様の書き方は〈曹全碑〉にだけ見られる。

後…〈封部残碑〉〈熹平石經〉〈池陽令張君碑〉ともに縦長の造形をとっている。

高…「高」の書き方には「口」につくるものと梯子型に造るものがあるが、〈封部残碑〉は「口」に作る。ちなみに〈礼器碑〉〈曹全碑〉は「口」に、〈乙瑛碑〉は梯子型に作る^{註10}。

武…〈礼器碑〉〈西嶽華山廟碑〉は「戈」のソリが長く強調されているが、〈封部残碑〉はポリウムがあるものの方形に収めたため、強調の度合いが薄れてしまった。魏晋の隸書碑は方形に作るものが増加している。なお、魏〈上尊号奏〉〈受禪表〉はソリの部分を二筆で書いている。事…〈乙瑛碑〉〈礼器碑〉〈史晨碑〉は第一画目を長めに引いて全体のバランスを保っている。〈封部残碑〉はさほど長い横画には作らないため、文字の下部に重心が置かれる。

鮮…〈封部残碑〉は「魚」を「角」に作る。この書き方は他の漢碑には見られない。〈鮮于璜碑〉の「解」字の角偏と全く同じ書き方である。「魚」と「角」が書き換え字とする例はないため、単に書き手の俗字としての書き癖、もしくは刻者の誤刻の問題かもしれない。後考に俟つ。

婦…「婦」の偏は篆体からみて「𠂔」と書くのが一般的だが、〈封部

残碑」は横が一画多く「**𠂔**」としている。また〈乙瑛碑〉は「**𠂔**」と「**𠂔**」との二種類の書き方が同時に用いられている。〈張遷碑〉は偏の上部を「且」に作る。

離…〈封部残碑〉の偏「离」の書き方は他の漢碑に類例がない。〈礼器碑〉〈曹全碑〉は「**𠂔**」と書き、〈熹平石經〉は「离」と書いている。なお、〈封部残碑〉の「离」はすでに指摘したように、「擊」の左上部と同じ書き方である。

年…第一画目の払う「ノ」の書き方は〈封龍山頌〉にも見られる。通常は〈熹平石經〉のように作るが、正確には「年」字に二系統がある。一つは〈封部残碑〉のように三本の横画を一本の縦画で貫く書き方である。もう一つは篆意を残して「禾+干」に作るもの。例えば、〈李孟初神祠碑〉〈張景造土牛碑〉〈孔宙碑〉〈韓仁銘〉〈尹宙碑〉などがこれに該当する。なお、〈乙瑛碑〉のように縦画と三本の横画との間に二つの点を左右に打つ書き方もある。

歳…〈封部残碑〉は「**𠂔**」に作るが、この書き方は〈張景造土牛碑〉も同様である。〈西嶽華山廟碑〉〈熹平石經〉は「**𠂔**」に作る。〈張遷碑〉は〈三老諱字忌日記〉と同じ造形「**𠂔**」に作る。

在…〈封部残碑〉はケイサンを先に書いているように見えるが、実際は「**ナ**」であるはずである。「在」には二つの書き方がある。一つは〈礼器碑〉のように五画で書く書き方と、〈張遷碑〉のように左下に短い縦画を入れて六画で書く書き方である。

攝…旁の下部の書き方は、「**𠂔**」には「**𠂔**」とあり、〈尹宙碑〉〈張遷碑〉は同様に作るが、〈封部残碑〉は「**𠂔**」に作る^{註11)}。

四…秦の〈嶧山刻石〉は「**𠂔**」に作るが、漢隸は「**𠂔**」「**𠂔**」が混在する。〈封部残碑〉は〈乙瑛碑〉〈礼器碑〉と同様の書き方である^{註12)}。

建…〈礼器碑〉〈西嶽華山廟碑〉のエンニヨウは「**𠂔**」に、〈史晨後碑〉〈白石神君碑〉は「**𠂔**」に、〈曹全碑〉碑陽は「**𠂔**」に作り、魏晋になると「**𠂔**」に簡略化される。〈敦煌出土漢簡〉や〈居延漢簡〉もやはり同様に簡略化されたものが主である^{註13)}。〈封部残碑〉のエンニヨウは魏晋の石碑と同じように簡略化された書き方である。

惟…〈礼器碑〉のリッシンベンは篆体を残した「**𠂔**」に作る。〈張遷碑〉〈西狭頌〉は「**𠂔**」に作る。リッシンベンは時代の推移とともに簡略化が進んだように思われるが、〈封部残碑〉は篆体を残し、魏〈正始石經〉でも同様に篆体に戻っている。

奚…〈封部残碑〉は「**𠂔**」ではなく、ケイサンと「八」とを組み合わせた形に作る。この書き方は他に類例がない。

斯…「其」の中を「十」に作るのは、篆体に基づいたものである。〈曹全碑〉〈張遷碑〉は「其」に作る。しかし、降って晋〈皇帝三臨辟雍碑〉では篆体の筆画を残している。

邊…〈封部残碑〉の旁は「自」と「守」の組合せである。通常「守」の部位は「寸」ではなく「方」に作る。

四、特徴的な造形感覚

(一) 左右の払い出しの収筆部に「燕尾」のような細線を残す

周・史・命・招・廉・後・鮮・来・歳・在・攝・提・先



「鮮」「歳」「攝」「提」の縦画から左へ押し出す筆法は独特で、払い出さ

ずに一端留めるが勢いで毛先がハネたように先が尖る。この書きぶりは、
〈夏承碑〉〈王舍人碑〉〈池陽令張君残碑〉にも見られるが、〈封部残碑〉
の方がより顕著である^{〔註14〕}。こうした書きぶりは魏の〈受禪表〉〈孔羨碑〉
などにも受け継がれている^{〔註15〕}。

参考



(二) 頭部の突き出し 論・旌・命・除・領



「命」の頭の部分を長めに突き出している。これは「論」「旌」「除」「領」

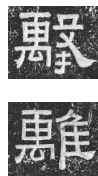
にも共通している造形である。この頭部の突き出しは、〈封部残碑〉ほ
ど顕著ではないが、〈熹平石經〉にも見られる。ちなみに「命」の「口」

部は、逆コの字型に造る。これは珍しい造形であるが、〈池陽令張君残碑〉
のほか、古くは〈馬王堆帛書〉にこの書き方が見られるので、指摘して
おきたい。

参考



(三) 撃と離の字形



「撃」の「惠」と「離」の「离」は意味をまったく異にするが、ここ
では同じ書き方になっている。音通など何らかの繋がりがあれば、書き
換える理由も成り立つが、ここでは当てはまらない。パターン化された
書きぶりの一例と見たい。

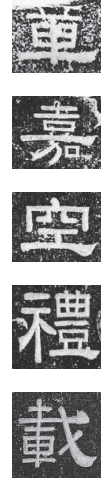
(四) 一字の中で強調する筆画 暨 嘉 語 翼 河



主として長い横画を一つだけ強調している。このように他の筆画に比べ
て際立って太く強調している例は珍しい。パターン化された書きぶりの

一例として指摘しておく。

(五) 波磔の呼吸の短さ 章 嘉 空 禮 載



〔張遷碑〕は重厚な筆画により、波磔の払い出し部分の運筆の呼吸は短めになるが、〔封部残碑〕ほど短くない。

参考



張遷

張遷

張遷

(六) 短縮する脚部 語・撃・翼・旌・命・卑・年・甲



脚部を極端に短く作った結果、文字はやや不安定な造形になっている〔註16〕。

〔西嶽華山廟碑〕の「年」や〔乙瑛碑〕の「甲」と比較してみるとその相違がよく分かる。

参考



五. 後漢晩期～魏晉にかけての書風の変遷

康有為『広藝舟双楫』に「至于隸法、体気益多、駿爽則有〔景君〕〔封龍山〕〔馮錕〕、疏宕則有〔西狭頌〕〔孔宙〕〔張寿〕、高渾則有〔楊孟文〕〔楊統〕〔楊著〕〔夏承〕、華艷則有〔尹宙〕〔樊敏〕〔范式〕、虚和則有〔乙瑛〕〔史晨〕、凝整則有〔衡方〕〔白石神君〕〔張遷〕、秀韵則有〔曹全〕〔元孫〕。」とあるように、後漢の桓帝靈帝次期は分書が成熟の域に達し、まさに百花斉放の感がある〔註17〕。その理由は国教となった儒家思想の影響により、「樹碑立伝（碑を樹て伝を立てる）」し、生前の功名を輝かせんとするためである。ちなみに、湯大民『中国書法簡史』では、漢代の碑刻伝存は四百種に達し、桓帝・靈帝時代の名碑（少仕州郡等字残碑）（一二三）から〔張遷碑〕（一八六）まで二四種を列挙している〔註18〕。

沃興華『挿図本中国書法史』で、後漢後期の手厚い葬送儀礼にふれ「この種の刻碑風気は分書にその活躍の場を提供した」と指摘する〔註19〕。しかし、魏晉以降は基準となった〔熹平石經〕の影響を受けて、分書の字体はたいした発展の余地を失ったといえる。文字のサイズはほぼ一定になり、方整で「横平竖直」を旨とする字体に傾いた。本論考で取り上げた〔封部残碑〕はまさにこうした時代の推移の中で製作された石碑とい

うことができる。

最後に本論考で採り上げた主な漢碑について、補足事項を記しておきたい。

(一) 熹平石経

後漢・熹平五年（一七六）～光和六年（一八三）にかけて製作された碑刻。蔡邕らの奏請により「易」「詩」「書」「儀礼」「春秋」「公羊伝」「論語」の七種の経書を校定し、洛陽の太学に列置したもの。碑石の総数は四六石、一碑は三〇〇×一二〇cm。歴史上もっとも早い時期に政府によって製作された儒家の經典である。書体はすべて隸書のため、一字石経とも称される。後漢末～北朝時期にかけての度重なる戦乱や移動によって壊れたり失ったりした。北宋以来、洛陽で断続的に出土し、馬衡氏は『漢石経集存』を上梓している^{〔註20〕}。近年、洛陽の太学遺址において石経残石および碑趺が発見されている。

(二) 張遷碑

後漢・中平三年（一八六）、蕩陰県令に転出する張遷のために記念として建立したもの。明代初期に山東省東阿県で出土し、現在は泰安市内の岱廟内の歴代碑刻陳列室に列置されている。碑石は三一五×一〇六cm。古朴な隸書の代表とされる。西林昭一氏はこの碑の書は稚拙で書格が低いとか不自然な書だというような貶める評価に対して「ごく近いところから出土の鮮于璜碑の碑陰の書風と酷似しているところから、この地における一書風とみてよい。」と述べている^{〔註21〕}。

(三) 鮮于璜碑

後漢・延熹八年（一六五）の製作。一九七三年、河北省武清県蘭城村で出土した。碑石は高さ二四一×八三cm、厚さ一二cm。現在、天津市芸術博物館にある。碑陽と碑陰の書風に書きぶりの差がみられる。碑陽は扁平な結体を主とし、重厚で謹厳な趣を有している。

(四) 池陽令張君残碑

清の光緒二六年（一九〇〇）、河南省修武県で発見された。杜九錫、端方、葛成修、周進諸家の収蔵を通伝した。一九三五年、周進は碑の左側下半を手に入れた。一九三八年、黄伯川はさらに左側中間部分の残石を入手した。この三片の残石の内、二石は故宮博物院に、残りの一石は原石が不明であり、搨本だけが遺されている。『中国書法芸術』（秦漢）では、この碑の書法は〈熹平石経〉に近似しており「方整雄渾、結体嚴謹」といい、「長波曳脚」の勢はみられず、魏晉書風の先河を開くと述べている^{〔註22〕}。

まとめ

先行研究をもとにして、いくつか新たな見解を示すことができた。まず碑面は類例がほとんどない文字の配置（天地左右のスペースの取り方）であった。二つ目に特殊な字形・字体を用いていることである。〈張遷碑〉はつとに誤字や不適切な仮借字が用いられていることが知られている

が、〈封邨殘碑〉は誤記の他、違う字形・字体が複数使われていたことが分かった。さらに、左右の払い出しの収筆部に見られる「燕尾」、頭部を突き出す奇抜な造形、一字の中で強調する筆画、呼吸の短い払い出し、あるいは脚部の短縮など、これまで見られなかった造形感覚であることを指摘できた。

王靖憲「東漢碑刻的隸書」中で、後漢の碑刻隸書をおおむね二つの類型に分けている。一類は字形が比較的正方度法度嚴謹、かつ波磔が明瞭であり、もう一類は書きぶりの法度がさほど嚴格ではなく、自由度が高く気ままな趣があると述べている。さらに続けて、前者の書には〈乙瑛碑〉〈史晨碑〉〈張景造土牛碑〉〈鄭固碑〉〈華山碑〉〈熹平石經〉〈張遷碑〉〈鮮于璜碑〉などが該当し、後者は〈三老諱字忌日記〉〈陽三老刻石〉〈武梁祠画像題榜字〉〈開通褒斜道刻石〉〈石門頌〉などが挙げられるという。また〈鮮于璜碑〉は方正嚴謹な書で〈張遷碑〉〈景君碑〉〈衡雲碑〉〈西狹頌〉に近い書風であるとしつつも、一種特有の風格を持つ漢碑であることを指摘している^{註23)}。

先行研究によれば、〈封邨殘碑〉は〈熹平石經〉〈張遷碑〉と近似しているという指摘であったが、本論考ではけっして近似しているとは言えない部分を抽出することができた。そこで、王靖憲が指摘する一類をさらに細分化して、①扁平な造形で端正な姿を有する謹嚴な書きぶりのもの。その代表的なものは〈乙瑛碑〉〈礼器碑〉〈史晨碑〉〈曹全碑〉など。②方形な造形で風格が雄渾な書きぶりのもの。〈張遷碑〉〈西狹頌〉〈鮮于璜碑〉など。これに加えて③方形ではあるが、用筆と造形にやや

パターン化した姿態がみえる書きぶりのもの。〈夏承碑〉〈王舍人碑〉〈封邨碑〉〈池陽令張君殘碑〉がこれに該当する。一類においてはこうした三つのグループ分けが可能であると考えられる。

〈礼器碑〉〈乙瑛碑〉〈曹全碑〉のように扁平な字形が主体で、文字と文字との間隔が確保されると、整然かつ端正さがより際立つ。一方、〈張遷碑〉で代表されるような方正な漢碑も受容され、〈熹平石經〉で用いられたような規範化された文字に落ち着く。こうした変遷の中で、よりパターン化した用筆によつて製作されたものの一つが〈封邨殘碑〉であったと考えたい。また、〈封邨殘碑〉の書きぶりは、魏の〈上尊号奏〉〈受禅表〉などに繋がっていくことを指摘できるであろう。

本論考には思い込みによる誤謬も少なくないと思われる。識者のご批正をいただければ幸甚である。

註

1 胡湛・石從枝「刑州新出土《漢封邨殘碑》考」は、『書法叢刊』(二〇二〇—二〇二一)の六二頁—七二頁に掲載。徐立君、胡湛「刑州新出土《漢封邨殘碑》考」は、『中国書法』(二〇二〇—二〇二一)の一八二頁—一八七頁に掲載。

2 邨は①古代の地名 ②姓氏の意味がある。碑面を見ると、「邨」の一字上に辛うじて「圭」の左下半の筆画が見えていることから、「封」字と判読できる。胡湛・石從枝がすでに指摘するように、この部分を読めば「封邨、遠歷式代暨周」となる。つまり、「(堯)は邨国を封じ、遠く兩代を歴て周王朝に及ぶ」の意味となり、邨は地名であることが分かる。

- 3 碑文第四行に「刺史陶」が見える。『三国志』に「陶謙、字は恭祖、丹陽の人。少くして学を好み、(中略)盧令に除せられ、幽州刺史に遷さる」とある。幽州と荊州は近接した地であることから、胡湛・石從枝は陶謙の可能性を指摘している。
- 4 碑文には「司空宗公」とあるが、漢末に宗姓で司空に任ぜられた者は靈帝の時の宗俱である。宗俱は宋俱であり、『後漢書』宋均伝にその記述が見える。それによると、宋俱(？～一七二)は靈帝の時、初めて太常となり、建寧四年(一七二)、司空を拜さるも、翌年、病没した。
- 5 胡湛・石從枝は極めて詳細に考証している。第二行「□□巳冬十一月甲」は当該碑の最終部分の紀年と考えられ、これを他の漢代の碑文と比較すれば、この部分は鐫刻立碑の年月に該当すると結論づける。妥当な推論である。ほとんど欠損がなく判読できる文字は八三字、一定程度は欠けてしまっているが判読可能な文字は一字～三字にのぼる。
- 6 『張遷碑』は碑陽と碑陰でその書きぶりがやや異なる。『書法叢刊』に掲載している図版は碑陰ではなく、碑陽の文字を比較対象としていと考えられる。『熹平石經』は、蔡邕らの奏請により「易」「詩」「書」「儀礼」「春秋」「公羊伝」「論語」の七種の經書を校定し、洛陽の太学に列置したもので、総数四六石にのぼる隸書碑である。その後の戦乱などで壊れたり、失われたりした。北宋以来、洛陽で断続的に出土しているが、その書風はそれぞれ經書で多少違いが認められる。
- 8 行間に一定のスペースを保つ意匠は、後漢の石碑にはほとんど見られなかったものであるが、一例を挙げれば、二〇〇〇年六月、四川省蘆山県で出土した後漢の〈趙儀碑〉(二〇八)がこれに該当する。
- 9 〈馬王堆帛書〉には複数の例があるため、一画書き忘れたということではない。
- 10 〈三老諱字忌日記〉(五二)は「口」に作り、〈石門頌〉(一四八)は梯子型に作る。また魏の〈正始石經〉(二四〇～四九)は「口」に作るが、〈王基殘碑〉(二六一)は梯子型に作る。二種類の書き方は、長い期間にわたり許容されてきたものであろう。
- 11 『隸辨』に載せる「攝」には二種類を見ることができ、ここでは〈周憬功勲銘〉を採用した。
- 12 秦の〈嶧山刻石〉の原石は早くに亡佚して現存しないが、長安本・紹興本など六種の重刻本を見ることができ、ここでは重刻本に拠った。
- 13 一九〇七年、甘肅省敦煌県遺跡で出土した〈敦煌漢簡〉(シャパンヌ本)や一九三〇～三一年、甘肅省エチナ川流域で出土した〈居延漢簡〉などはみなエンニヨウを簡略化した書き方である。
- 14 〈夏承碑〉「後漢・建寧三年(一七〇)の刻」の原石は築城用の石材として砕かれてしまった。河北省永年県に重刻が現存するというが、現在見ることができると拓がどこまで真を伝えているかは不明である。〈王舍人碑〉(一八三)は、一九八三年、山東省平度県出土。方形な字姿が多い。
- 15 〈受禪表〉は〈上尊号奏〉とともに、河南省漯河市北郊の碑亭に創建時の状態で現存する。ただし、碑面は激しく摩滅しており、拓本自体も字口が分りにくい。その中でも掲載した「皇」の最終画の波磔部分の燕尾の様子は比較的良好に分かる方である。
- 16 「荊州新出土〈漢封部殘碑〉考」では、頂部や底部の筆画が圧縮されていることを指摘し、その例として「年」「甲」「事」字を掲出している。
- 17 康有為『広藝舟双楫』の「本漢第七」参照。
- 18 湯大民『中国書法簡史』(二〇〇一年、江蘇古籍出版社)一〇三頁～一〇四頁参照。
- 19 沃興華『挿図本中国書法史』(二〇〇一年、上海古籍出版社)一二九頁参照。
- 20 馬衡『漢石經集存』(一九五七年、科学出版社)参照。

- 23 22 21
西林昭一『中国書道文化辞典』（張遷碑）の項（六四五頁）参照。
張啓亜主編『中国書法芸術』（秦漢）「池陽令張君殘碑」（二六九頁）参照。
王靖憲「東漢碑刻的隸書」（『中国碑刻全集』戦国秦漢（二〇一〇、人民美術出版社）参照。

表1 文字比較表

史：史晨（前後）碑 華：西嶽華山廟碑 繁：繁敏碑 曹：曹全碑 乙：乙瑛碑
 礼：礼器碑 尹：尹宙碑 牛：張景造土牛碑 彪：孔彪碑 璜：鮮于璜碑
 衡：衡方碑 韓：韓仁銘 游：子游殘碑 正：正始石經 受：受禪表

標準的な文字	封部等碑	張遷碑	熹平石經	池陽令碑	参考
 史					
 史					 繁
 華					 曹
					
 礼					
 礼					 礼
 礼					 彪
 乙					
 史					 華  正
 衡					 繁

標準的な文字	封部等碑	張遷碑	熹平石經	池陽令碑	参考
 乙					 曹  曹
 礼					 曹
 礼					
 乙					 礼  曹
 華					 曹  受
 乙					 礼  史
					 辟  * (解) 璜
 乙					 正
 礼					 曹
 華					 乙  尹  牛  韓
 華					 牛

標準的な文字	封部等碑	張遷碑	熹平石經	池陽令碑	参考
 礼					 史  華
 尹					 隸辨
 礼					 史  尹
 華					 羨  敦
 礼					 狹  正
 游					 曹  辟
 孔					 曹  辟
 衡					 鮮  辟